

「共に念仏して」

第 12 組 極善寺 松本 香奈子

私は 30 歳のときに僧侶になりました。あるとき、お参りに伺った先で、父親を亡くされたご門徒の方と出会いました。その方は、

「仏事は親に任せきりで、私は何もわからなくて……」

と申し訳なさそうに、また恥ずかしそうにおっしゃいました。もちろん、私は、

『そんなこともしらないのか』

などとは思いませんでした。私自身が、まだ駆け出しの僧侶だったからです。ご門徒の方から尋ねられるたびに、住職である父に聞き、本を開き、法話に耳を傾けました。僧侶のくせに

『知らない』

とは言えなかったからです。

私の心にあった

「僧侶のくせに」

という思いは、ときに自らを責め、情けなさや恥ずかしさを覚えさせるものでした。それは、何も知らないとおっしゃった、ご門徒の方とどこか同じ心持だったように思います。

お寺での生活の中で、私はさまざまな方と出遇わせていただきました。若いころからお念仏に親しんでこられた方々にも次々と出遇いました。そうした方々は私をお内仏の前へと案内してくださり、一緒にお勤めをし、一緒に念仏し、共に仏法を聴聞してくださいました。その聞法場で、私は次のような言葉に出遇いました。

『教えは、自分の思いや考えを持って聞くものではない。それこそ、思いもよらなかったことを教えられる。それが教えを聞くということであり、自分の思いを超えた教えに出遇うことこそ、驚きであり、感動なのです。』

この言葉は、ずっと私の心に入ってきました。

宗祖親鸞聖人は、

『御同朋、御同行』

と仰いました。共に念仏に生きること、命を確かめ合うこと——そこには、上下の隔てなく、共に歩むという大切な教えが示されています。

駆け出しのころの私は、

「僧侶とは、すべてを知っており、門徒の方々を教え、導かなければならない」

と思い込んでいました。しかし、いくら学んでも、仏法の教えを自分の思いで解釈してしまい、本当の仏法の教えに出遇えず、難しさを感じていたことを思い出します。

ああ、私の抱えていた

「僧侶のくせに」

という思いは、間違っていたのだ——。そう気づかされたとき、

「御同朋、御同行」

という言葉が、心の中でひととき大切に響いたのでした。

それから 10 年が経ちました。あのとき

「何も知らなくて……」

とおっしゃっていたご門徒の方とは、いまも毎月のお常飯や、お寺の法要でお会いします。一生懸命に手を合わせながら、あのときと変わらず、

「まだまだ何も知らなくて……」

と微笑まれるその姿に、私も励まされる思いで、共に仏法を聴聞させていただいています。